

自撰日	冬の題	歌 岩崎純一	通釈	語釈	他歌人欄(評)	他歌人欄(派生歌など)
岩崎純一歌集 『新純皇余情和歌集』>冬の部 歌集名読み しんじゆんせいよせいわかしふ 作者 岩崎純一 通釈・語釈 園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさる、蝶子、沙月式部、雪実少納言、岩崎純一(自釈) 作者サイト http://iwasakijunichi.net/ 和歌ページトップ http://iwasakijunichi.net/waka/						
2008/4/1	雪	うすくくむら消えむとはしらじらと緑も見せぬ野辺の白雪	薄かつたり濃かつたりするむら消えとなるとは知らぬ顔で、いかにもそぞらしく白々と降り積もって、下の緑も見せない野辺の白雪。	◇掛詞「白々と×知ら(ぬ)」 ◇本歌取「うすくき野辺の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え」(宮内卿『新古今』)		
2008/4/1	雪	月かはり花のたもとを待つまでに雪をめぐらす袖返しつづ	月が改まって秋の月が終わる中、次の春の花の美を待ち、花のような袂の着物を待ちながら、雪を巡らせているかのように冬の着物の袖を返しつづ、美しく舞っている冬の女よ。			
2008/11/20	初冬	昨日までひぢ踏む音の朝戸出に氷は薄くだけそめつづ	昨日までぬかるみを踏む音しかなかった朝の外出の足元に、薄氷が砕け始めた。		◆秋から冬への変わり目を、地面を踏む音の変化によって捉えた、繊細な感覚の一首 ◆「氷は薄くだけそめつづ」は和歌らしい優雅な詞遣い ◆自然と氷が砕け始めるような言い方にも聞こえ、足もとで次から次へ氷が砕けてゆく感覚を表現するにはややそぐわない(水垣久) ◆「氷を薄くだきそめつづ」としなかった点、自然に砕けることがある砕氷の現象をも踏まえているが、難解で やや言葉足らず。(長瀬たき)	
2008/11/20	落葉	褪せぬまに色をば衣にうつさなん赤黄青(あかきあを)なる道の朽葉は	褪せないうちに色を着物に移したい。赤、黄、青、様々な色の道の朽葉が綺麗だから。		◆道に落ちて間もなく、なお鮮やかな色を留めている木の葉を惜しむ心を、「衣にうつさなん」と古風な趣向を借りて歌い上げた一首(水垣久)	
2008/11/29	寒草	花までの庭の日数を憂ふとも白む草葉の冬のあけぼの	庭の桜が咲くまでの日数を憂えてみるけれども、白雪を帯びて明けてくる冬の明け方もまた深い情趣を帯びていることよ。		◆庭に春の花が咲き誇る日は遠く、その日数を思うだけで心は鬱屈するけれども、冬の美しい曙光に白む草葉に、辛うじて慰めを感じている心 ◆霜枯れた草に朝日が射すさまに、憂いも融けるような美と希望(水垣久) ◆「白む」は、朝日の光や霜、さらには銀世界の反射など、冬の曙の白色を生み出しうるあらゆる自然現象を思い浮かべてよいだろう。(長瀬たき)	
2008/11/29	小春	風の上にはほはぬ梅もありやとて見えし梢は小春なりけり	風の上に匂い漂わない梅の花もあるものだと思議に思ったが、ふと木々の枝を見て気づいた。今は、「花のない春」ではなく、冬の小春なのだ。		◆梢にこぼれる陽射を白い花に見まがうというのは巧んだ趣向(水垣久)	
2008/11/30	霜	何(なに)冬を咲かぬ折りとぞ思ひけむ落葉も霜の花に薫れり	なぜ冬を、何も咲かない季節と思っていたのか。落葉も霜の花に薫っているではないか。	◇「霜の花」	◆古人の美意識を事改めて発見した感動(水垣久) ◆「木枯しも跳ぬる」は突飛 ◆水溜りを人が飛び越えるイメージに重ねた面白みを読み取るべきところ? ◆水なら月影は揺れるが、水では「揺るが」ないという発見(水垣久) ◆「跳ぬる」は奇抜だが、「揺るがず」に氷の静止ぶりを、「跳ぬる」に氷の凝固ぶりを込めたか。(園井長光)	
2009/1/2	氷	木枯らしも跳ぬる道辺の夕氷映れる月の影も揺るがず	木枯らしの風も飛び跳ねるほどに固く張った、夕方の道端の氷。映っている月の影も揺るがない。			
2009/1/2	冬星	我が星に近く明るく照るともなほとほしき冬の長庚(ゆふつつ)	我らが地球に近く赤々と照ると言っても、やはり「とほしき」と、つまり、気品ある宵の明星。「遠く、白い」のだ。	◇掛詞「とほしき×遠白き」		
2009/1/2	歳暮	年ごとに鏡の影はうつれどもさてこそ深き大晦日かな	年ごとに、鏡に映る我が身は移りゆくが、だからこそ情趣の深い大晦日であることだ。			
2009/1/10	雪	春の目はその色々をしたふとも心ぞとまる雪のよろめき	春を好む目は、その花々の様々な色を追い慕っているけれども、心がとまるものは、よろめくように降る雪である。	◇参照『美徳のよろめき』三島由紀夫		
2009/1/29	暖房	消え消えぬ埋み火の夜のなかなかに袖とふ梅のほひだになし	消えるか消えないか、どっちつかずの夜の埋み火の情趣の中、袖を訪れる梅の匂いは少しもない。あの人を私を訪れてくれないように。	◇掛詞「夜の中×世の中×なかなかに」		
2009/1/30	寒樹	もみぢ葉に色をかこちし月影も梢に細き冬木立かな	紅葉の葉に色をらせて照っていた月影も、紅葉の散った冬木立の木々の梢に、今や細く照っている。			
2009/2/4	冬夜	風過ぐる梢のひまに星見えて光さびしき冬の山道	風が過ぎてゆく木々の梢の間から、寂しい光を放つ星々が見える、冬の山道。			
2009/2/19	冬星	月にだに色なずらふるよしもなしひとりにはべる冬の長庚(ゆふつつ)	その独特の色は、月の美しい色にさえなぞらえることができない。たった一つで輝いている冬の宵の明星。		◆大きさは到底比べものにならない月を比較の対象としたことに特徴がある一首(水垣久)	

2009/2/19	暖房	なかなか春の香こめて吹く風に消ゆる消えぬをまよふ埋み火	なまじ春の香りを立ちこめて吹く風に、消えるか消えないかを迷っているような埋み火。			
2009/2/21	待春	咲かばまた疾(と)しと惜しまむ同じくは春待つ心冬に尽くさむ	桜が咲いたら、また昨年と同じく、「早くも散ってゆくのか」などと惜しむことになるのだろう。ならば、春を待つ今の心を、冬のうちに味わい尽くし			
2011/9/7	返し	ぬばたまの月なき夜半の闇のうちに霜にかはりし花の白露	月の出していない夜の闇のうちに、冬の霜へと変わった、秋の花の露よ。	◇枕詞「ぬばたまの一月、夜」		◆ぬばたまの夜渡る月に隠れなばかへり見もせぬ玉ゆらの露(光源氏、本歌、「うたのわい」)
2011/11/2	鶯	白鷺の弥生の梢思ふ頃霜まよふ底の夕暮れの花	白鷺が三月の桜の梢を思い慕う頃には、まだ桜は、夕暮れに置き迷う霜の底に隠れた、幻の花なのだ。			◆白鷺の知らで越しつる春のなほ緑濃き枝にとまりつるかな(祭主持麿)
2011/12/1	返し	霜朽ちの我が手末(たなすゑ)と冬の梅梢聞こえぬ儂さの奥	霜に全てが朽ちる冬の中、霜やけの私の指先よ。まだ梅の花の香りも梢に聞こえない儂さの、奥深い情趣よ。			
2012/1/30	冬月	さやけさも昨夜(こそ)を限りの定めにて雲の首に曇る月影	秋のさやけさも昨夜に終わりを迎えた運命で、今日、月影は、雲の首の奥に曇って見えない。			
2012/9/18	枯野	かへり見る夢も紛へぬ草の原弥生の色は空のみにして	春の頃を振り返りつつ眠ると、春の桜の下に帰ってきた夢を見た。その夢の中でさえごまかすことのできない枯野よ。あの三月の桜花の色は、今や空のみに残された色即是空の姿にあって。	◇縁語(仏語)「色、空」 ◇『源氏物語』『花宴』 ◇参照「見し秋を何に残さむ草の原ひとつにかはる野辺の景色に」(良経)		◆「伝統和歌+CG画像」の試み(2)